

『狭衣物語』

女二宮の身体をめぐって

表出の方法あるいは〈媒体〉としての身体——

土 井 達 子

はじめに

女二宮は物語に登場するや、懐胎・悪阻・出産・産褥期の不調を経、さらに出家のために断髪し、その身体にめまぐるしい変化があった。しかしながら、身体が急変する中であつて、女二宮は、沈黙し、他者に対して言葉を閉ざし続け、心の内に思うことを言葉として浮上させない。言葉を閉ざす女二宮において、心と、言葉と、身体をめぐる相互の関係が、いまだ注目されるべきではないかと考える。一方、狭衣との逢瀬の折にその「腕」が源氏宮を呼び起こし、出家後も狭衣に髪や袖をとらえ続けられるなど、女二宮をめぐって、その身体は、物語の中で絶えずざわめきをともなつたものであつたことも、辿り見ていくこととしたい。

一、秘密と悲嘆を語る身体

狭衣が立ち去った後、帝のもとから退出してきた母・大宮は、女二宮の寝所に懐紙が落ちているのを見、また、その紙や、女二

宮自身が臥している場所に高貴で優雅な移り香を感じ取る。男の侵入を疑い胸を騒がせているところに、女二宮が一夜を通して泣き続けた様子を目のあたりにする。

姫宮の御殿籠りたるやうなるを見たてまつりたまへば、よもすがら泣きあかしたまへりける御衣のけしきも、いとしほど
けげにて、ひき被きたまへる御髪、いといたく濡れたるを、
さればよ、人の入り来たりけるにこそありけれ、あな心憂や、
誰なりつらん、……（八三—八四）

疑いを決定的なものとしたのは、女二宮の濡れた衣と髪であつた。それも、「いといたく」、並み一通りの濡れ方ではない、それであつた。女二宮は、何も語らず、また、語ることもできない。しかし、それであつて、誰とも知れない者の侵入とその男と関係が生じてしまったことを、女二宮の濡れた衣と髪、そしてそこに重ねられる沈黙が、しっかりと語ってしまっているのである。女二宮にできる精一杯のこととしては、大宮が驚愕し涙に暮れるさまを、寝たふりを装って傍らで聞き臥しているしかない。

人目つつみあへられず、涙せきかねたまへる御けしきも、姫宮御殿籠りたるやうなれど、聞き臥させたまへるに、やがて消え入るやうにぞ思さるる。(八四)

もはや、事実の露呈に何一つ否定を加えることは可能ではなく、女二宮は、「聞き臥す」という姿勢の中に籠もり、自らの心中さえも、語ることができず、それを自身の内へと込めていくのである^(三)。

そして、女二宮の身体は、「ものをのみ思しくづはれて臥し沈みたまへる」(九一)ことで周囲の人々に「あやし」と思わせ、やがて、懷妊を仄めかすこととなる。

三月よりはまことしう苦しうしたまひて、日に添へて頼もしげなきさまになられたまへば、よろづの憂きことも忘れて、いかなるべき御ありさまにかと思し嘆くに、(九二)

「三月よりは」^(三)、三ヵ月目より、女二宮は悪阻に苦しむ。「あやし」とは思うものの、誰も懷妊に気づかない中で、日毎に女二宮は、その身体を弱らせていくのである。やがて、その「あやし」の様子、人々に懷疑と不安をもたらし様子が、病ではないものと知れたのもまた、女二宮の身体の変化であった。

常よりも暑き昼つきた、御帳の帷少しあげて、床の上に貂の御座ばかりにて、紅の羅の御単衣、生絹の御袴ばかりをたてまつりて、腕を御枕にて臥させたまへるに、額髪のことさらに捻りかけたらんやうにこぼれかからせたまへる面つきな

ど、さばかりその人とも見えぬまで瘦せそこなはれたまへるしも、いと白う隈なき御色あはひなど、いま少しあてに心苦しう、羅の御単衣も重げにあはれなる御さまを、大宮はつくづくと見たてまつらせたまふに、腕のたゆさも知らせたまはぬにこそと心苦しう悲しうて涙こぼれたまふ。うちみじろきて苦しと思したるに、汗も押しひたしたるやうに見えたまへば、近う寄りて、うちあふがせたまへるに、単衣の御衣の胸少しあきたるより、さばかりうつくしき御乳の例ならず黒う見ゆるに、心さはぎせられながら目とどめさせたまへれば、隠れなき御単衣にていとしるかりけり。(九二—九三)

女二宮の体の不調は痛々しく、宮自身と見えぬまで瘦せ細り、顔色も悪く、薄物の単衣さえ重たそうに見えるほどであり、重病に苦しむ人であるかのようなのである。昼寝のさまも、心地よいものとしてではなく、苦痛を伴い、暑さがその苦しみに拍車をかけるのである。内へと込められていった宮の内面の苦しみを表出し、あるいはそれと連動して、女二宮の身体は苦しむのであろう。そこへ、女二宮の懷胎をはつきりと告げる乳の色の変化が、大宮の目にとまったのであった。体調の変化ばかりでなく、こうした視覚的な懷妊の兆候については、『夜の寝覚』の中の君にも窺えることであった。

この三月ばかりは例のやうなることもなく、おのづからとれて見ゆる御乳の気色などを、御方を見たてまつり知りたまふ

に、すべて言はむかたなし。(小学館日本古典文学全集「夜の寝覚」七七—七八)

瘦せる、苦しむ、吐く、といった身体の変化、それ自体は、悪阻が妊娠の特徴だとしても、周囲の人々にとっては、妊娠に限られた症状とは見えず、何らかの病とも見られたかもしれない。「さばかりうつくしき御乳の例ならず黒う見ゆる」ことは、語らない女君自身に代わって、妊娠の早い段階で女二宮の懐妊を動かない事実として表すのである。身体の曖昧な変化を決定的に告白するのもまた、宮自身の身体であつたのである。宮が密かに出産するために母とともに宮中を退出するに際し、その段階で大宮だけが懐妊を知る必要があつたとも考えられ、女二宮の身体が懐妊を明白に告げることは、そうした女二宮の秘密の守られ方、ひいては女二宮自身の行く末とも密接に関わつていたのである。

二、苦しむ 身体

女二宮は、誰とも知れない男の侵入により、「ものをのみ思しくずされて臥し沈」んでいた。「臥す」という姿態は、単に偶発的な身体の自然としての「臥す」姿態なのではなく、内面の抑制された苦悩を物語るものであつた。こゝうした意味を持つ「臥す」に加え、女二宮の懐妊の苦しみ、悪阻は、「三月よりは、まことしう苦しうしたまひて、日に添へて頼もしげなきさまにならせたまへば」(九二)と「苦し」によって表現されて、宮の苦悩を一

層顕著に浮かび上がらせる。

『源氏物語』において藤壺の場合、「なやみ」が悪阻を示していたが、女二宮については、心中の苦しみと運動するように「苦し」が使用されているのである。また、その後も女二宮に「苦し」あるいは「苦しげ」の語が再三使用されることも、注目したい。昼寝の後も、「うちみじろきて苦しと思したるに、汗も押しひたしたるやう」(九三)であり、暑さに対しても、「いとかくいみじきことまでは思しもよらで、いと苦しげに暑さを扱はせたまふさまも」(九五)といった様子であり、父帝も、「いまのほどいかにぞ。暑ささへあやになる頃かな。いかに苦しく思さるらん」今朝のほどに、また、苦しきこそまさらせたまひにけれ」(九五)と女二宮のことを氣遣つている。

そうして女二宮自身が苦しむ一方で、その姿態は、「さばかりその人とも見えぬまで瘦せそこなはれたまへるしも、いと白う隈なき御色あはひなど、いま少しあてに心苦しう」(九二)と気高い美しさを湛え、宮の内面、身体の苦痛の深まりとともに、外面の美が増していくことが語られるのである。病臥する人の瘦身の美については、『源氏物語』が、紫の上や柏木、大君などにおいて表現したことは周知の通りであるが、女二宮もまた、自身の内に込められた苦しみ、身体的な苦痛が、外へは、美となつて現れていたのである。

しかし、そうした苦しみの美に縁取られる身体は、言うまでも

なく、「死」と隣り合わせのものであった。また「死」へ向かうからこそ、なおさら、その美が輝きを増すのであろう。女二宮も、内面の苦しみが身体を内破し、突き崩すかのように、意識も危うく、「死」をすぐ近くまで引き寄せていく。さらには「今日明日にてもまづ先だちきこえて」（九九八）と自ら念ずることによって母宮とともに、その身体を一層衰弱させていく。

・かく頼もしげなくなりましたまふめるを（九九六）

・げにさも、とてかく頼もしげなくなりましたまへるに（同）

・いと頼もしげなき御ありさまどもなれば（九九八）

・我まづ先に、いづれも同じさまにて頼もしげなき御ありさまどもなれば（九九九）

ただし、やがて悪阻の苦しみも収まり、冬の初め、出産の日も間近になると、女二宮の容体も落ち着きを見せてはくる。

姫宮は、おほかたの御心地はなかなかこのごろとなりては、苦しくもおはえさせたまはねど、御身のありしにもあらずならせたまふままには、恥しう、いみじからんほどのありさまを、つひにいかにならんと思すに、いとみじう悲しきに、（九

九）

しかし、胎児が宿り、自身の知らないところで膨らむ身体は、女二宮にとっては恥ずかしく、また、出産の際に、限られているとはいえ、それに携わる人々に身を晒さなければならないことを思うと、その気持ちは増し、また、出産に伴う「死」も意識され、

それまで淡然と「死」を願っていたにもかかわらず、それが現前のもので迫ってくるとなると、恐怖と不安も生じてくるのであった。それでも、生まれくる子が、大宮の子ではなく、女二宮の子であることを父帝が漏れ聞いた折のことを推測すると、再び、自身の存在がかき消えてしまうことを願うのである。

いかなることありて、あぢきなき御心がまへのあさましきなど言ひ伝へ、上聞かせたまはんなど、人知れず思さる。ただかくながら、いまの間にも消えいりなばやと思すけにや、常よりもいと苦しくて暮れゆくを、羊のあゆみの心地して、さすがにもの心細く思さるるに（九九九）

女二宮は、心に去来するもののせいか、再び心身ともに苦しみ出し、引かれ行く羊のように、「死」への接近を感じ取るのである。「死」を手繰り寄せ、恐れ、また近づくと、いう軌跡を心に描き、たゆたいながら、女二宮は出産へと向かうのであった。

後に宮は、産後その身体が回復する中で、「死」へ自分自身の意志で近づこうと試みる。女二宮が心身の苦しみから脱するのは、そうした試みの中で、出家が果たされた時であったのである。

「死」と運動しながら、女二宮の苦しむ身体は、宮の内面の苦しみとともにあったのである。⁽⁷⁾ 苦しみは苦しみにあるひとが吞み込むもの、口⁽⁸⁾もるものであり、苦しむ者はことばを失い、苦しみを表出できない。言葉にならない、言葉として発することのできない、押し込められた苦痛、苦悩を女二宮の衰弱してゆく

身体は「死」に接近しつつ発現させていたのである。

三、「出家」を主張する身体——「かひなくて
かぎり」「まことに消えはて」「むげに冷え
はて」——

七日過ぎぬれば、姫宮は、心よりほかにとまりぬる命と口
惜しく恥づかしきことを思せど、げにかぎりあるわざにや、
心地もやうやうさはやかになりて、（一〇五）

若宮を出産して七日、女二宮は、死を望むものの、意に反して
その身体は回復してゆく。やがて大宮が亡くなり、自らも遅れま
いと思うのだが、やはり、その思いとは逆に、身体に変化は見ら
れない。

・ 姫宮は、さらに後れたてまつらじと思し惑へど、心にはなほ
ざりける。（一〇五）

・ げに憂きに堪へたる御身にや、煙となりたまひぬるも、（一
〇六）

・ はかなう月日も過ぎて、御四十九日も果てぬれば（一〇七）
このとき、快方へ向かう女二宮の身体は、宮の痛切な悲嘆や孤独
やへ人笑へんの不安といった心中の痛みとは別にある。女二宮は、
自らの思うようにはならない身体、というものの、心と体が時と
して別々に動くものであることを実感せざるを得ない状態にあつ
た。しかし、狭衣との婚儀の前に、何とかして命を消してしまひ

たい、さまなければ出家を、と願う女二宮は、それがすぐには叶
えられそうもないと推測するや、その別々の心と体とに對して、
自分の身体を、自身の思い、願ひへと近づけ、心の方に身体を一
致させようするのである。つまり、死へ向けて、自らの身体を調
節し、コントロールしていこうとするのであり、具体的には、飲
食を断つことによつて、身体を衰弱させ、死に近づこうと試みる
のであった。

いかにしてさることなからんさきに、命絶えずは身をあらぬ
さまにしなしてばや、さばかり思ひつつ消えはてたまひにし
御身の苦しきを、知らず顔にてはいかでか過ぐさん、身の上
よりほかに、この世に思しむすぼることはなかりしものを
と、つくづく、過ぐる日数に添へては思しつづくれど、さ
すがに我が御心ひとつには、すべきやうもなく、人にのたま
はせんには、只今よきことと言ふべきならねば、たけきこと
とは、湯をだに見入れさせたまはで、（一〇七）

心中の痛み、悲しみ、苦惱より発した身体を死に近づける試み
であつたが、それは、次第に、死への執念とも言えるべきものへ
と膨らんでいき、やがて、女二宮の意志に従うかのように、その
身体は弱り果てていくのである。

「さしも思したりし身を、いままで後らかしたまへるが心憂
く、あはれと思しめさば今日明日迎へさせたまへとのみ思し
めせば、げに日に添へて頼むべきさまにもあらずぞ、なりた

まふめる。(一〇七—一〇八)

いよいよ、女二宮は、死へと近づいていくかのように見える。ただ、死が叶えられそうでもあったにもかかわらず、宮はここで再び出家を願ひ出る。

かひなくてかぎりと思さるる夕つかた、内裏より参りたる少将内侍を召し寄せて、「さかしきやうにやとつましうおほゆれど、暗きに紛らはして、日ごろはよろしくやと待ちつるに、今日はとまるべうもおほえねば、仏の御しるしもやと試みまほしうおほゆれど、上に聞えさせてはいかではとなん思ふを、いかなりとも見んと思さは、今宵のほどに申して」とのたまへば、(一〇八)

ここまで具体的な会話文のなかった女二宮の、物語中での初めての会話文は、出家を口にすることであった。沈黙を守る女君たちが、出家の思いを語る時に至って自発的に「声」を発するのは、『源氏物語』の女三宮、浮舟と同様である。ほとんど語ることのない女君たちが、苦惱を経て、自身の「声」で表出する意志は、まさに出家の決意だったのである。

ただ、若年者の出家が吟味を要求され、押しとどめられる傾向にあって、『源氏物語』の二人の女君が出家を願ひ出でから実際に果たすまでの過程を見ると、女三宮の場合、産後の不調に加え、女二宮が回復し、健康な状態での出家は、光源氏の宮への希薄な愛情と冷徹さを世間に確認されるべき「人笑へ」になると

いう朱雀院の不安が大きく関与しており、浮舟においては、浮舟自身が、病を理由に横川の僧都に繰り返し嘆願するという形で出家が果たされたのであった。

しかしながら、女二宮の場合は、その「身体」を瀕死の状態に晒して、死へと漸近しながら、出家への執念を見せ、周囲の納得を取り付けようとするのである。

またの日などは、まことに消えてさせたまふさまにて、稀々はただ、「少しもあはれと思ふ人あらば、かくながらはさりともしやは」とのみ、息の下にのたまはするを(一〇八)

やがて、女二宮の願ひは聞き届けられ、出家の作法への運びとなるが、ここでも、女二宮の美しい髪を見るにつけて、人々の悲嘆が高まり、剃髪がためらわれるや、宮は、もはや死体同然となることによって、その儀式を促すのである。

その作法して鉦うち鳴らしたまふを聞く人々の心地、上下とも思えず、そこら多かる宮のうちの人々泣きあひたるさま、大宮の亡せさせたまひしさまよりも、なかなかいと心あはたらしいみじけなり。乳母たちの「きろきろとなしたてまつりても、たひらかにておはしまさば」とさかく言ひつれど、御髪かきいでて削ぐを見るは、ただ人だに目もくれまどふを、まして年ごろ、いかにして一筋落したてまつらじと明け暮れ我が身の大事にけづりつくろひつつ、千尋にあまるまでもとなでたてまつりたまふに、かひありてかばかりの類あらじと

見えさせたまふを、なくなしたてまつるは、なかなかむなく見なしたてまつらましもまさりて心もをさめられず、みな臥しまるぶにうち添へて、そこらの女房上下泣きあひたるに、いとゆゆしくいみじきに、むげに冷えはてたまひぬれば、ざりとてはとて、削ぎ落しきこえたまふに、(一〇八一—一〇九)冷えきつた身体が、死を端的に表すことは、『源氏物語』の夕顔が物の怪に取り憑かれ、その身体が「冷えに冷え入りて」といった様子で息絶えたことが想起される。夕顔の如き冷たい身体によつて、女二宮は、出家を遂げることへのすさまじいまでのこだわりを露わにする。言葉で何一つ語ることなく、身体そのものを犠牲に晒して、人々の反対を押し流し、出家を遂行してしまうのである。いや、もはや死と出家とを同時に果たそうとする、強い意志に支えられた究極の姿勢、身体の凄絶な有りようとして取れよう。

「死」と「出家」とが隣り合わせにあるという緊密な関係⁽¹²⁾を基底に、ここでは、出家が世間的な死として「擬死」であつたことと、女二宮が「むげに冷えはて」てその身体が一時「仮死」状態に陥つたことが重なり合い、「死」と「出家」とが二重写しとなつて「死—再生」⁽¹³⁾が逃げられるという点に注目されるのではない。死、出家が、心身の復活と再生、そのイニシエーションとして存在し、機能していると考えられるのである。

それは、「仮死」状態を脱し、出家が果たされるやいなや、忽ち、

女二宮の身体が、何事もなかつたかのように回復するところにもまた、看取される。

げに忌むことのしるしにや、かくて消えいることもよろしうならせたまへば、我が御心にも、いまはいかでかしはしながらへて、行ひもせばやと、こよなう思ひ強りつつ、湯などもあながちにして召しなどすれば、あるかなきながらも過されたまひける。(一〇九)

身体⁽¹⁴⁾の回復がはかられるとともに、女二宮は、生きて仏道修業に励もう、と生きることへの意欲を見せ始める。身体とともに、心も、生へと向うのである。出家以前、あれほど遠ざけていた「湯」でさえ、いまや、「あながちにして」まで飲むのであり、その身体と心は、出家が達成されることによつて、ともに生きる力を取り戻し、それぞれ別々ではなく、一つの方向、「生」へと結ばれていくのであつた。

四、出家後の身体の方へ〈触覚〉への抗い

御姿・様体、御髪のゆらゆらとこぼれかかれるより始め、額髪のただ少し短く見えたる御つらつき、あこが瓜にかきたるやうなる。ただことさらに、かくて見まほしきさまのしたまへる月影を、中納言の典侍、つくづくと見参らせて、なほなほ飽かず口惜しうおぼゆるも、「見たてまつらまほしげに明け暮れ賁めさせたまふ人に見せたてまつりたらましかば、い

とどといかに」と思ひ続けらるる折しも、(二二七—二二八)

仏前の、月の光に照らし出された女二宮の姿は、中納言の典侍の目を通して、出家が惜しまれるほどの美しさであることが語られる。しかし、とりも直さず、その「なを飽かず口惜しう」という表現は、女二宮をやはり「女」として見ようとする姿勢に基づくものであり、狭衣にこの姿を見せたいという思いこそ、そのま

(15)

ま狭衣の欲望の視線に繋がりを、重なるもの、と見て取れよう。この場面の直前には、すでに狭衣が女二宮の御堂に忍びよることが語られており、月影の女二宮の美しい姿態は、体、髪、顔、と細かい部分に分けて注目されながら、まさに狭衣の侵入、狭衣の欲望に随伴して、描写されているのである。

その狭衣の侵入に対して、女二宮ができることといえは、「かしこう入りはてて、たてさせたまへるに、わだわだとふるわれてえ遠くも逃れたまはず、やがてうつ臥させたまへり」(二一九)というぐらひであつて、また、「いかにもいかにもえ動かれたまはぬ」(二三〇)という状態でしかなかった。ついに「御袖を引き寄せ」られると(二三〇)、「まことに消えいりぬべき御けはひの、あるかなきかなど」(二三〇)と、ほほ氣を失つてしまう。

ただ、御髪のかぎり、所狭うおほえし手さぐりの、いとふさやかに触れりたるぞ、なほなほ、いみじう愛しかりける。(二二

三二)

袖に続いて、髪も狭衣に触れられてしまう。出家後の女二宮の

身体は、自らの意志とは別に、無防備であり、狭衣の手に忽ちとらえられてしまうものであったことが、まざまざと見せつけられている。

ここでの宮自身の当惑は、心内語ではなく、「汗」という身体的・生理的作用、それも、袖の上までの「こちたさ」で表される。宮の感情は、「汗」という形で辛うじて狭衣に伝えられるのである。

御袖の上まで透り行く御汗のこちたさは、「何事も、みなことはり」に、と思ひたまへり知りたる、(二三二)

言葉を発表すれば応えたことになってしまい、コミュニケーションが成立してしまう。あくまで狭衣との交渉を断絶したい女二宮にとつて、いかなる言葉も狭衣の前では呑み込まれてしまうのであるが、同時に、仏前にて狭衣に近づかれたことに対する衝撃、動揺、極度の緊張と恐怖、不快な感情から、「声」や「言葉」が失われた状態にあつて、そうした宮の心情を「汗」が伝えるしかないのである。暑さが語られる以外の場面で「汗」の語が女君たちに見受けられるのは、女君たちにとつて日常を逸脱した、「言葉」を失うほどの異常事態にはかならない。

しかし、狭衣は、未だ女二宮の「御袖を、とみに見ゆるしたまはず」(二三二)、手や腕の外延とも言える「袖」をとらえ続けている。そうして狭衣は、女二宮の髪・袖に触れ、触覚によつて宮を感じ取り、離さない。従つて狭衣は、女二宮を想起する際も触覚によるところが大きい。

あはれになつかしきにも、ありし夜の手あたり、まづ思ひ出られたまひて、只今、さしむかひ見たてまつらまほしく、例の、涙こぼれぬべきけしきにて、(二五三)

女二宮が源氏宮の形代として、「腕」によって繋げられる、(触覚)による形代としてあつたことも考え合わせられる。また絶えず狭衣は女二宮にかつての「けちかきほどのあはれ」を求めているが、それによって、女二宮は源氏宮を凌駕する思慕の対象としても存在していたのであつた。その「あはれ」は(触覚)によって促され、確認されていくものであり、狭衣は自身にとって身体的に近かつたこと、「けちかき」ことがあつたことから、再びそのような「あはれ」が女二宮との間に生まれ得ることを願い、夢想し、信じるのである。そうして女二宮が仏道に帰依した身であつたにもかかわらず宮に近づき、袖や髪に触れること、(触覚)によって、「あはれ」の思いを継続させ、増殖させるのである。

ただし、狭衣の「けちかきほどのあはれ」と、女二宮の「かばかりのけちかきには、また聞かれじ」(三三三)という明白な拒否の姿勢は対極にあり、両者の心理的な乖離が、「けちかき」「けちかさ」と、現実には互いに「けちか」くはない状況を、表現を同じくしつつ、アイロニカルに照射し、語っているのは重視される。

けれども、女二宮のこうした姿勢を顧みようとしない狭衣は、最終場面においても、宮の袖をとらえ、引き寄せていた。

消えはてて屍は灰になりぬとも恋の煙はたちもはなれじと、のたまはするままに、御簾のうちに、半ら入らせたまひて、御袖の端を引き寄せて、泣きかけさせたまふ涙の滴の所狭も恐ろしうわりなきに、(三四七)

出家後、狭衣から逃れ得たと思つていたにもかかわらず、身体は、絶えず狭衣の視線に、手にとらえられ、「女君」として引き戻されようとする。「女」そのものとして近づかれてしまい、女二宮は、常に危険に晒され、ぎりぎりの状況に留め置かれてしまふのである。女二宮の、仏道を希求し、清澄へ向かう歩みは阻まれ続けるのであり、無防備であるしかない女二宮にとって、精一杯の抗いは、「うつ伏し」「動かれ給はぬ」などといった、(無抵抗)のかたちを取った抵抗でしかない。そこには、自身の身体でありながら、思うにまかせ得ない、女二宮の悔しさが滲み出る。自身は「尼」として「世捨て人」として生きているにも関わらず、狭衣は依然「女」として女二宮をとらえる、その相反する、両義的な様相が、女二宮の身体をめぐる攻防の有りように、現れていると言えよう。過去を手繰り寄せ、今も変わらず、今以上に宮を思慕する狭衣と、過去と決別し、仏道に生きようとする女二宮の、両者の明らかな齟齬が、そこに窺えるのである。

終わりに

女二宮の身体は、女二宮の様々な心理、意志を、言葉では語り

ない、語れない宮に代わって、語り出す。

悲嘆、苦悶、出家への執心、出家生活の保持のための意地「女」として生きることへの拒否——といったことを語り続けるのである。しかしその身体は、そうしたことを語る一方で、狭衣により「触覚」によって感じ取られる。その美しさで「視覚」的に狭衣を引き付けるのみならず、常に「触覚」によっても狭衣の心をとらえ続けていたのである。即ち、女二宮の言葉にならない内面を表すと同時に、宮の意志に関わらず、狭衣の宮への思慕をかき立てる欲望の装置としてもあり、女二宮の身体は、宮の心に寄り添いつつも、身体を持ち自身の思いに任せ得ない部分をも露呈する。そうした矛盾を女二宮の身体は抱えながら、しかし、宮は、静かな抵抗を持続させつつ、それを自らの意志によって越えていこうとしていたにはかならない。

(注)

- (1) 鈴木泰恵「狭衣物語の表現機構——女二宮をめぐる——」(『国文学研究』平3・3)
- (2) 松井健児「源氏物語の生活内界」(『岩波講座 日本文学史』3 岩波書店、平8)は紫の上の「臥す」を「内面との長い交渉の結果としての」「婆絶な姿」と見る。橋本ゆかり「抗う浮舟物語——抱かれ、臥すしぐさと身体から——」(『源氏研究』平9・4)は浮舟において「臥す」ことの様々な意味を看取し、「自己を自己として閉じ込めて守ろうとするかのようなしぐさ」という側

面を指摘する。各々女二宮の「臥す」と密接に関連づけられる。

- (3) 「三月」を新編全集は「みつき」、岩波大系、新潮集成は「やよひ」と訓む。「三月」については、藤壺の懷妊をめぐる「三月になりたまへば」とあったことが想起され、影響が窺えるが、大森純子「源氏物語・孕みの時間——懷妊、出産の言説をめぐる——」(『日本文学』平7・6)はこの数字の「まぎらわしさ」を説く。また、「夜の寝覚」の中の君にも「この三月ばかりは」の記述が見られる。

- (4) 注(2) 松井論文。

- (5) 石坂晶子「なやみ」と「身体」の病理学——藤壺をめぐる言説——(『源氏研究』平12・4)

- (6) 松井健児「柏木の受苦と身体——深まりゆく身、身の深みへ——」(『源氏研究』平9・4)

- (7) (5)の石坂論文は藤壺について、(6)の松井論文は柏木について、内なる苦しみ・心理的苦痛が、病・肉体的苦痛と運動し、一体であったことを述べる。また、山口昌男「病の宇宙誌」(『知の遠近法』岩波書店、昭53)は病が単なる身体の異常事態ではなく、何らかの意味を内奥に存在させるものとしての「メッセージ」としての病について解析する。

- (8) 鷺田清一「苦痛の苦痛」(『聴く』ことの方——臨床哲学試論——) TBSブリタニカ、平11)

- (9) 内閣文庫本「げに、憂きに堪へたる御身にや、煙となり給ぬるにも、後れ聞え給て、七日く果てつ方にもなり給ひぬるも」岩波大系・一六二、九条家旧蔵本「うきにたえたる身にや、雲煙にもつみにたちをくれ給はて、はてつ方にもやうく成ぬ」(未

完国文資料 狭衣物語と研究・上、一二六、流布本「げに憂きに堪えたる御身にや、煙の雪となりたまふにもつひに立ち後れたまひて、七日七日の果てかたにもやうやうなりぬ」(新潮集成・上一八五)の各々傍線部分すなわち「憂きに堪えたる身にや」を受ける部分が深川本にはない。他本は大宮の四十九日にも生き止まる様を明記する。

- (10) 女三宮については橋本ゆかり「女三の宮出家をめぐる語らい」(東京女子大学日本文学 平4・3)、三苫浩輔「橘のひと女三宮」(愛知学院大学文学部紀要 平6・3)、浮舟については吉野瑞恵「浮舟と手習」存在とことば」(むらさき 昭62・7)、吉井美弥子「夢浮橋巻の沈黙」(中古文学 平2・1)、北村貴子「浮舟物語試論・一 浮舟物語と風景」(藤女子大学国文学雑誌 平6・11)など。

- (11) 丸山キヨ子「浮舟について」(源氏物語と仏教 創文社、昭60)
(12) 原岡文子「あはれ」の世界の相対化と浮舟の物語」(源氏物語 両義の糸 有精堂、平3)
(13) (14) 中西進「源氏物語」における死」(日本文学と死 新典社、平元)

- (15) 「視覚とはまなざしよって触ること」(メルローポンティ「絡み合い」キアスム「メルローポンティコレクション」筑摩書房、平11)であることも考え合わせられる。

- (16) 岩波大系本、九条家本、新潮集成本、ともに「御手」。
(17) 葛綿正一「身体・しぐさの杜草子―機知と身体」(国文学 平8・1)は清少納言が機知を発揮し得なかった時、「汗」が「失語」と結びつくことを指摘する。機知ではないが、「言葉」を失うこ

と、「汗」の状態にあるさまとは密接な関係にあり、女三宮にも「源氏物語」の女君たちの「汗」にも見て取れる。

- (18) 鈴木泰恵「狭衣物語と 形代」―身体感覚をめぐる―」(武蔵野女子大学紀要 平7・3)

- (19) 萩野敦子「狭衣物語」女二宮物語論「あはれ」「つら」を軸として」(国語国文研究 平8・3)

- (20) 「わたし」の境界と身体をめぐることは、鷲田清一「悲鳴をあげる身体」(PHP研究所、平10)など参照。

- (21) 三田村雅子「黒髪の源氏物語―まなざしと手触りから―」(源氏研究 平8・4)は、女君の髪を、男たちの欲望と女の拒否を浮かび上がらせるトポスであると示唆的に論じる。女二宮の場合、さらには、身体そのもの(衣や袖といった身体の外延も含めて)が、そうした両者のせめぎ合いの場として晒し置かれていることに注目したい。

※テキストは吉田幸一「深川本 狭衣とその研究」を用い、巻二は小学院新編日本古典文学全集「狭衣物語」1により、巻三・巻四は私により適宜漢字を当て句読点を施した。

(こい たつこ 岡山大学大学院博士課程)